

学的解釈を加えたのはアレクサンドリアの文献学的方法を聖書に適用しようとする彼の同僚の恣意的な校訂作業に余地を与えないためであり、字義的解釈が意味をなさない場合には敢えて哲学的アレゴリーを適用して聖書本文を守ろうとしたのである。クレメンスが哲学のために弁明的記述を行った背後には、箴言五章三節に基づいてヘレニズム文化や哲学を批判するキリスト教徒たちの存在があった。これに対してフィロンの解釈を継承したクレメンスは、聖書解釈を通じて信仰に役立つ限りにおいて世俗の学問に一定の役割を与えようとした。

オリゲネスは創世記の「サラハガル伝承」を予備教育との関連ではなく、聖書解釈法の文脈で扱っている。彼は『諸原理について』第四巻二章四で三層的聖書解釈の方法について述べた後、具体的な聖書箇所を挙げて三種類の聖書解釈法の説明をしている。ここで彼は「ホメロスをホメロスによって解釈する」方法をパウロの範例(ガラテア四章二以下)に倣って聖書解釈に適用し、「聖書を聖書によって解釈する」聖書の内在的解釈法を確立すると共に、さらに旧約聖書の六欄組対観「ヘクサプラ」の編纂に際してもアレクサンドリアの文献学的方法を積極的に採用している。ただし「ヘクサプラ」の編纂に際して彼が他のギリシア語訳に対して当時の「七十人訳(LXX)」をキリスト教の立場から正当化する意図があったことは否定できず、その点ではフィロンとある種の共通性が認められる。

さらにオリゲネスは『雅歌注解』の序文において、ギリシアの三つの諸学(倫理学、自然学、観照学)をソロモンに帰される「箴言」、「伝道の書」、「雅歌」に対応させると共に、ソロモ

ンの優越性を借用論によって示し、キリスト教教育においてはソロモンの三つの書こそが「真の哲学」であるとみなす。従ってオリゲネスは予備教育と哲学、神学の関係の位置づけを巡るアレクサンドリア神学の議論(「神学の侍女としての哲学」)を何らか意識しつつも、教会共同体の中で予備教育や哲学に一定の役割を認めるような議論を敢えて回避することで、聖書を聖書のみによって解釈する「テキスト共同体」の設立を構想していたと考えられる。以上のようにフィロン、クレメンス、オリゲネスは各々が置かれた共同体の具体的な状況に応じて聖書解釈を行っており、「テキスト共同体」の概念はアレクサンドリアの聖書解釈の系譜を辿るためには有効な概念であると考えられる。

ミトラ教研究

——一六世紀のゾロアスター教ペルシア語写本から——

青木 健

筆者は先に、一六世紀のゾロアスター教におけるミトラ神の復権を指摘し、その原因はホラーサーンのゾロアスター教平信徒が、インド西海岸バルーチのゾロアスター教神官に宛てて送った書簡にあるものと推測した。古代の神格に対する信仰が、近世に甦ったとの理解である。だが、その理由を説明するまでには至らなかった。

その後に検討を進めた結果、一六世紀になるとインドのゾロ

アスター教徒からイランのゾロアスター教徒に宛てられた書簡の中で、「誓約 (sougand)」や「契約 (peymān)」に関する質問が急増することが判明した。これにより、この時期にゾロアスター教ペルシア語教示書の中にミトラ神への言及が増加する理由は、単純な古代の神格の復活ではなく、誓約や契約の必要に依じて、それらを司る神として言及されている可能性が出てきた。誓約や契約の手續きに関する書簡からは、それらに関する質問が増加するインド西海岸の社会的背景までは窺い知れない。しかし、一六世紀のインド・ゾロアスター教徒は急激にそれらの指針を必要とする状況に至ったようである。

而して、ゾロアスター教ペルシア語書簡集の中には、『誓約の書 (Sougand Name)』と題した文献がある。本書については、管見の及ぶ限り、現在までにほとんど研究がなされていない。だが、筆者はこの文献について、ゾロアスター教内部で誓約の必要性が高まった最初期の状況を示しているのではないかと考えている。本発表では、この文献をゾロアスター教の誓約・契約文献の中に位置付け、ゾロアスター教の誓約・契約觀念の推移を再構成する為に本書の校訂と翻訳を試み、研究の基盤を提供したい。

二〇〇九〜二〇一〇年に筆者がテヘラン及びハイデラバード・デカンの写本図書館でゾロアスター教ペルシア語文献を調査した結果、イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 86907 Codex の中に、『誓約の書』と題したりサーラがあった。筆者は校訂中に掲げる理由によって、モーディーとウーンワラーの底本よりも、Majles 86907 Codex 所収のり

サーラの方がオリジナルに近いと考えている。本写本を底本とした校訂の結果、一六世紀のインド・ゾロアスター教徒は、物品と金・銀などの貨幣（鉄と衣服が貨幣に該当するのかどうかについては、中世イラン史及び中世グジャラト史の専門家のご教示を仰ぎたい）の交換に関するトラブルの解決を目指して「誓約」を行っていたことが判明した。また、当初はゾロアスター教的な神格一〇柱を保証者として「誓約」を行っていたが、取引の範囲が拡大するにつれて、異教徒（イスラーム教徒）とも共通するミトラ神（メフル神）にかけて誓う「契約」が主流になっていく様子も垣間見ることが出来た。

即ち、本発表は、一六世紀のゾロアスター教ペルシア語文献でミトラ神への言及頻度が上昇する過程を、単純に古代の信仰が復活したのではなく、インド・ゾロアスター教徒が「誓約」、「契約」を必要とする社会的状況に至ったのが原因ではないかという推測から出発した。その為に、新出のゾロアスター教ペルシア語写本に依拠して『誓約の書』を校訂し、一六世紀のインド・ゾロアスター教徒の「誓約」の詳細を明らかにした。ここでは、一〇柱のゾロアスター教的な神格が保証神格として用いられていた。而して、当時のペルシア・イスラーム文化においては、この一〇柱の神格のうち、僅かにミトラ神（メフル神）が神格として容認されていた。おそらく、インド・ゾロアスター教徒内に限定されていた「誓約」が、異教徒（具体的にはイスラーム教徒）も対象とする段階まで発展するに及び、この中でもメフルを挙げて相互の「契約」の保証神格として用いる慣行が整えられたものと思われる。